

噴火灣文化



【Funkawan Culture】

2020. 3 Vol.14

Date City Institute of Funkawan Culture
伊達市噴火灣文化研究所

■講演要旨

【縄 文】縄文まつりシンポジウム

〈講演〉「いま、北黄金貝塚に立つて“JOMON”の価値を考える」

福島県文化財センター白河館館長

縄文遺跡群世界遺産登録推進専門委員会委員長 菊池 徹夫…… P 3～4

【博物館】だて歴史文化ミュージアム講演会

〈講演〉「伊達騒動のリアルとフィクション」

独立行政法人日本芸術文化振興会監事 大石 学…… P 5～7

■発掘速報

【考 古】「全国の注目を集める遺跡ー有珠モシリ遺跡ーの発掘調査」

伊達市噴火湾文化研究所・学芸員 永谷 幸人…… P 8～9

【考 古】「縄文時代の大規模集落遺跡群ー若生2遺跡ーの発掘調査」

伊達市噴火湾文化研究所・学芸員 永谷 幸人…… P10～11

■研究ノート

【アイヌ】「17世紀アイヌ文化と環境に関する学際的研究」

北海道博物館・学芸員・理学博士 添田 雄二…… P12～13

【博物館】ICOM KYOTO 2019 ポストカンファレンスin北海道を終えて

だて歴史文化ミュージアム・学芸員 伊達 元成…… P14

■だて歴史文化ミュージアムのご案内…………… P15

■史跡北黄金貝塚公園のご案内…………… P16

表 紙

津田 直 GrasslandTearsシリーズより

© Nao Tsuda, Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film

伊達市の文化財が紹介された本・雑誌・TV番組

本・雑誌

■北黄金貝塚

- 御所野縄文博物館編『世界から見た北の縄文』新泉社【北黄金貝塚の貝層写真】
- JTBパブリッシング『ニッポンを解剖する！北海道図鑑』【北黄金貝塚写真】

■有珠モシリ遺跡

- 譽田 亜紀子『知られざる弥生ライフ』誠文堂新光社【クマ彫刻のスプーン・銚頭】
- 栗島 義明編『身を飾る縄文人』雄山閣【貝輪をつけた人骨】
- 設楽 博己『ヒスカルセレクション考古3弥生時代-邪馬台国への道』敬文舎【骨角器】

■だて歴史文化ミュージアム

- (株)柏館舎『ほっかいどう先人探訪 北の歴史を彩った53人』2019年1月【伊達保子】
- (株)ノーザンクロス「カイ」特集・まちの広場～土地の歴史と人の交わり～2019年4月【伊達市の歴史・文化財】
- (株)ぶらんとマガジン社「HO」Vol.140 2019年7月【亘理伊達家の開拓】

- (株)リクルート「じゃらん」2019年8月号【施設紹介】
- (株)ぶらんとマガジン社「HO」Vol.144 2019年9月【伊達政宗と伊達成実展】
- (株)北海道ジェイ・アール・エージェンシー JR「THE JR Hokkaido」2019年10月号【伊達政宗と伊達成実展】
- 総合商研(株)「JPO1」2019年10月【特別展・伊達政宗と伊達成実展】
- (株)Re Studio「北方ジャーナル」11月号 2019年11月【伊達政宗と伊達成実展】
- 伊達150年物語の会「侍たちの北海道」【伊達市の歴史・文化財】

TV番組

- 北海道放送「今日ドキッ！・週末ぶらりサーチ～伊達ぶらり～」2019年4月5日放送【施設紹介】
- テレビ朝日「超人女子戦士ガリベンガーV・武器の謎を解明せよ！」2019年6月6日放送【伊達成実公甲冑】
- 琉球放送「Aランチ・賀数仁然の沖縄ふしぎ発見！式」2019年12月21日放送【有珠モシリ遺跡出土イモガイ製貝輪】
- テレビ朝日「国民10万人がガチ投票！戦国武将総選挙」2019年12月28日放送【伊達成実公甲冑】

講演要旨
【縄文】

いま、北黄金貝塚に立って “JOMON”の価値を考える

福島県文化財センター白河館館長

縄文遺跡群世界遺産登録推進専門家委員会委員長 菊池 徹夫



縄文 はじめに

多くの方にお集りいただき、ありがとうございます。『北海道・北東北の縄文遺跡群』の世界遺産登録実現に向けた皆さんからの関心の高まりを、ユネスコに提出する推薦書の作成に携わる者としても嬉しく思います。

私自身、伊達市には何回も来ていますが、最近では、早稲田大学で社会人を対象としたトラベル・スタディーという研修旅行があり、世界遺産の構成資産¹を巡る中で北黄金貝塚を訪れました。この旅行は、2012年から始めたものですが、一昨日、ついにすべての構成資産を踏破しました。実を言うと、今日は、そのツアーの帰路、東京へ帰る参加者と離れてここに来ているのです。参加者に伊達市で講演をするとしたら、「応援している」「東京にも『北海道・北東北の縄文遺跡群』を世界遺産にしたいと願っている人がいることを伝えてほしい」と言われてきました。

さて、いよいよ世界遺産登録が近づいてきました。8月末には、1週間以上の時間をかけて現地審査のリハーサルを行ったところ。担当した各市町の学芸員や関係者は緊張感のあるなか大変だったと思いますが、縄文遺跡群を世界遺産にしようという活動をはじめから10年近い年月を経て、ようやくそういう段階になったということですから、感慨深いものもあります。来年はいよいよ本番です。

縄文 世界遺産に登録されるには

世界遺産そのものについて語るには、大学の1学期くらい時間が必要なので、ここでは簡単に説明させていただきます。

世界遺産は単に優れた文化財に与えられる「賞」といったものではありません。世界遺産という考え方は、もともと、1960年代にエジプトのアスワンハイダム建設によって水没の危機にあったアブシンベル神殿を救おうということで国際的な手が差し

伸べられることになったのがきっかけです。

1972年にユネスコの総会で「世界遺産条約」が採択され、今日に至ります。世界遺産は、国際条約に基づいて遺産を護り伝えていくという「約束事」と言えます。

世界遺産に登録されるには、まず、遺産の「真実性」と「完全性」を証明することが求められます。ピラミッドなど明らかにそこに見える遺産は分かりやすいのですが、縄文はどうでしょうか。竪穴住居に代表されるように土と木の文化で、しかも多くが土の中に埋まっています。この真実性や完全性を証明するのは難しいことですから、縄文遺跡群を世界遺産にするのは並大抵のことではありません。

さらに、真実性と完全性を示した上で、「顕著で普遍的な価値」があることを証明しなければなりません。「顕著な価値」は割と示しやすいのですが、問題は「普遍的な価値」の方です。日本の中だけで「日本の宝だ！立派だ！」と言っているだけでも、ユネスコからは「世界中の人たちにとって価値のあるものですか？」と問われるのです。本日の講演のタイトルに「JOMON」という字を入れましたが、それは、外国の人に「縄文」文化を知ってもらうという思いで最近よく使うようにしているからです。

また、国内における「万全の保護措置」がとられているかということも問われます。世界遺産は「登録されたら完了」というものではありません。ユネスコは、それからが大事なのだと言います。市民がしっかりと遺産の価値を理解して守っていく意思があるか、行政はしっかりとした予算を組んで保護に取り組んでいくか、それも永遠にということです。

これまで、顕著で普遍的な価値を証明するために皆で頑張ってきましたし、万全の保護措置のための計画も練ってきました。これらをユネスコに提出する推薦書に記載するわけですが、今まさに、最後の最後まで手直しに取り組んでいるところです²。



農耕・牧畜なしで1万年以上も続いた定住生活

さて、ここからは、推薦書のアピールポイントを紹介していきたいと思います。

なんと言っても、縄文時代は少なくみても1万年以上の長きにわたって続いた文化です。これが世界遺産推薦にあたっての重要なポイントでもあります。

西方の歴史をみると、旧石器時代が終わり新石器時代になると、麦を作ったり牛を飼ったりという農耕・牧畜を始めました。それに対して、世界史的にみれば同じ新石器時代の段階にある縄文の人々は、農耕や牧畜はせず、採集・漁労・狩猟を生業の基盤としながら、しかも資源を追いかけて転々と移動するのではなく、一か所に住み続けることができた、つまり「定住」していたのです。このことは、竪穴住居や墓や大規模な貝塚などが証明しています。

さらに、定住生活が続ける過程で、数的観念や土木技術、共同作業や社会秩序なども発達していったと考えられます。



自然環境に適応した生活

世界一豊かと言われる生物多様性に恵まれた日本列島を舞台として、縄文人たちは資源を巧みかつ積極的に利用しつつ、人口が少ないこともあって、また、適切な維持管理を行って、周囲の自然環境や生態系にうまく適応したサステナブル（持続可能）で調和的な生活を送っていたと考えられます。

それと関連すると思いますが、縄文の集落では、周りに壁や柵を立てたり、溝を掘ったりして外から入れないようにするといったことがなく、北黄金貝塚の風景がまさにそうですが非常に開放的です。外国の都市が城壁で囲まれていたり、「弥生」の集落に環壕があったりするのとは対照的です。

また、交通・交易システムがかなり発達していました。それは、黒曜石やアスファルト、ヒスイ、貝といった「もの」の移動だけではなく、情報や婚姻関係にいたるまで、近・中・遠距離地域と相当密接に交流していたと考えられます。



豊かな精神性「縄文スピリット」

外国の研究者たちに縄文文化の話をしていると、彼らは土偶などをみて「縄文スピリット」を感じると言って溜息を洩らすことがあります。また、土器の模様や装飾、ストーンサークルや貝塚などを見るにつれ、縄文文化の他に例をみないほどの豊かな精神性を感じざるをえません。

彼らが感心する縄文文化の精神性「縄文スピリッ

ト」を何とかもっとうまく説明して外国の方やユネスコに訴えたいものです。その時、貝塚の中に人の墓があり、貝塚が単なるゴミ捨て場ではなく、きちんと命を送り返すための場所なのだと教えてくれる北黄金貝塚の存在が大きな意味を持ちます。



なぜこの地域、この遺跡群なのか？

北海道や北東北以外の地域で世界遺産の話をする、「どうして北海道と北東北の遺跡だけが世界遺産になるのですか？」ということをよく聞かれます。縄文文化の遺跡は北海道から沖縄にいたるまで日本列島全域にあるのに、どうして4道県17遺跡に限るのか。

簡単にまとめて答えることは難しいのですが、まず、前提として、世界遺産の直接の対象は不動産だということがあります。だから「国宝になるような立派な土器や土偶があるのにどうして世界遺産にならないのか」と言われても、それは無理なのです。ひとつひとつの遺物がいくら素晴らしくても、それだけでは世界遺産にはなりません。世界遺産の対象はあくまでも不動産、つまり「北海道・北東北の縄文遺跡群」の場合は遺跡それ自体です。

そして、この地域は、①縄文文化中核の地であり、しかも、「弥生」と最も遠いことから縄文文化が比較的ピュアに遺された地域であること、②時期的にも、内容的にも過不足ない遺跡が揃っており、17の遺跡それぞれが個性を発揮しあいながら集まって、構成資産全体の顕著で普遍的な価値を物語ることができること、③大規模な遺跡が状態良く遺されており、史跡指定もされてきちんと保存・管理されているものが多いことなど、世界遺産に推薦される価値のある特質を持っているのです。

更に言えば、この地域は、首長たちをはじめ住民・行政・関係者が早くから連携して強力に事を推し進めたからでもあります。



「北の黄金」を世界遺産に

お話しの最後に、一番大切に皆さんに伝えたいと思うことを申し上げます。それは、市民、特に有志・ボランティア・生徒・児童をはじめとする地元住民の自覚、誇り、決意です。それがこれからは、ますます「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録へ向けた最大の力になります。

伊達市にある「北の黄金」。この宝物を、皆さんと一緒に世界遺産にしたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

- 1 「北海道・北東北の縄文遺跡群」を構成する4道県にまたがる17の遺跡。
- 2 2020年1月16日、推薦書がユネスコに提出されました。

(2019年8月31日 第22回だて噴火湾縄文まつりシンポジウム 講演)

だて歴史文化ミュージアム講演会

講演要旨 【博物館】

令和元年11月23日にだて歴史文化ミュージアム・ラーニング・スタジオにて、「伊達騒動のリアルとフィクション」と題し、NHK大河ドラマ「新選組!」「篤姫」「花燃ゆ」などの時代考証を担当された大石学氏（独立行政法人日本芸術文化振興会監事）にご講演いただきました。江戸時代の文化や社会のリアルを多くの文献からご解説されると同時に、「伊達騒動」という仙台藩の御家騒動を題材にした歌舞伎「伽羅先代萩^{めいぼくせんだいはぎ}」の映像を交えながら、フィクションの表裏について、ご講演していただきました。

＜講演＞伊達騒動のリアルとフィクション

独立行政法人日本芸術文化振興会監事 大石 学 氏



寛治3年（1660）、陸奥国仙台藩で伊達騒動といわれる御家騒動が起きました（仙台藩では寛文事件ともいう）。当時、藩主伊達綱宗の隠居後、2歳の亀千代（綱村）に家督が譲られ、同時に綱宗の叔父伊達兵部少輔宗勝（政宗10男）が亀千代の後見を命じられ、実権を握ることになりました。その際、奉行の原田甲斐らと結び藩権力の集権化をはかる兵部と、自主性の強い地方知行制を維持しようとする伊達氏一門衆が対立したことに起因します。この出来事は、後に歌舞伎の演目「伽羅先代萩^{めいぼくせんだいはぎ}」や、山本周五郎の小説「縦ノ木は残った」などの題材になりました。

今日はこの伊達騒動を演題とした歌舞伎のシーンから、再評価されつつある江戸時代の姿を考えてみたいと思います。

テレビドラマなどでは、勧善懲悪史観のもと、正義の味方が、バッサバッサと悪人を切り捨てるといった伝統的なチャンバラストーリーが描かれてきました。たとえば、水戸黄門、暴れん坊将軍、遠山金四郎などがそれです。しかし、現実の江戸時代では、理由なく抜刀したり相手を切り捨てたりすると、刑罰の対象となり、テレビドラマの世界とは大きく異なっていました。

そこで、リアル江戸時代をみてみます。注目するのは「平和」と「文明化」という二つのポイントです。

慶長8年（1603）から慶応3年（1867）までの足かけ265年にわたる『徳川日本（Tokugawa Japan）』＝『江戸時代』は、その大部分が、国内・対外的に戦争のない『徳川の平和Pax Tokugawana^{パクス・トクガワナ}』とよばれる『平和』で『文明化』した時代でした。

それ以前、16世紀の約100年にわたる戦国時代は、多くの武将・英雄を生み出しました。しかし彼ら戦国の勝利者は、いうならば、より多く人を殺し土地を奪った人物たちでした。こうした価値の戦国時代を克服し、「平和」の時代＝江戸時代に入ると、これらの行為は犯罪とされます。武器は国家規模で管理され、唯一武器の保持を認められた武士たちでさえも、自らの判断で勝手に武器を使用することを禁止されたのです。それは日本を訪れた外国人にも驚きを持って評価されています。

たとえば、フランス海軍士官のE.スエンソンは「帯刀した者たちの間で流血事件が起きたと耳にするのはめったになく、この国の人間の性来の善良さと礼儀正しさを存分に物語っている」（『江戸幕末滞在記』デンマーク人1866年来日）と書き残しています。また、外交官のルドルフ・リンダウは「日本という国は、あらゆる文明国の中でも、武器を持つ習慣が最も広まっている国であるので、その危険な習慣の不都合を出来るかぎり避けるために、厳しい規則を採用せざるを得なかった。正当防衛以

外の場合でなければ、路上で何人も刀を抜けば、決まってこの上なく重い罪に問われるのである……槍の刃先、銃の銃口さえもが丁寧に鞘に包まれているのは、平和時に、なんなれと武器を人の目に曝すことを禁じている厳しい禁止命令のためなのである。敵国に遠征するときにはしか鞘は外されないのである。」（『スイス領事の見た幕末日本』1861年から3度来日）

この『平和』に注目することにより、江戸時代のイメージは、従来の近代社会との断絶面に注目する『封建制』、すなわち、領主（武士）の抑圧・収奪面の強調から、近代との連続面を評価する『初期近代（アーリーモダン）』、すなわち近代の準備、近代化の第一歩と、捉えられるようになったのです。

つまり江戸時代の領主である武士は、兵農分離や転封政策によって在地性を失い官僚化し、領地の民衆（農民）とは、文書主義・契約主義など恣意がはたらきにくいシステムが形成されました。民衆の一揆・騒動なども、領内不取締りとして御家断絶など

の処罰の理由となるため、安全第一、御家第一の前例主義や横並び主義の官僚的支配が普及していったのです。しかも多くの武士たちは、自領地からの年貢ではなく、幕府や藩から蔵米（サラリー）を与えられて任務を遂行する存在となりました。武士が権利として武力を発動する『チャンバラ』は、現実のシーンから消えていったのです。

そして、この『徳川の平和』を基礎から支えたのが、『江戸の教育力』です。『江戸の教育力』は、武力による問題解決を禁止し、訴訟裁判という解決方法を明示し、社会を『平和』『文明化』させたのです。江戸時代の武器不使用や教育普及にもとづく秩序維持は、世界を見てきた多くの来日外国人が高く評価するところです。

では、伊達騒動を題材にした「伽羅先代萩」のシーンから、武力ではなく証拠と書類によって成敗される様子をみてみましょう。

この演目では伊達家ではなく奥州の足利家を舞台としています。足利家の執権・仁木弾正や妹・八汐

伽羅先代萩 登場人物

足利頼兼【あしかがよりかね】

奥州の大名。叔父の鬼貫ら逆臣方にはめられて隠居させられる。

足利鶴千代【あしかがつるちよ】

まだ幼いが、逆臣方の計略により父・頼兼が隠居させられたため足利家の当主となった。

大江鬼貫【おおえのおにつら】

頼兼の叔父で、足利家の乗っ取りを企む典型的な「叔父敵」の役。仁木や黒沢官蔵らとともに策をめぐらして情勢優位に展開していくが、勝元の裁決により敗北する。

仁木弾正【にっきだんじょう】

足利家の家老だが妖術使いでもある。お家乗っ取りを企む鬼貫らと結託し、一派の中心人物となっている。渡辺外記左衛門ら忠臣方の反攻にあい、細川勝元の裁決によって敗北が決定。最後は外記らに討たれる。典型的な「実悪」の役柄。

細川勝元【ほそかわかつもと】

問注所を束ね、裁判官の役割を果たす管領の一人。年齢は若い公平な人物で、山名が外記らに対して下した裁決をいったんは支持する態度をみせながら、弁舌さわやかに仁木らを徐々に追いつめ、ついにはその罪を暴いて忠臣方勝利の裁決を下す。

山名宗全【やまなそうぜん】

もう一人の管領で逆臣方に肩入れしており、勝元の留守中に裁判を行い、渡辺民部が提出した証拠をろくに見ないで焼き捨てるなど、不公平な裁決を下す。

渡辺外記左衛門【わたなべぎざえもん】

足利家の忠義な老臣。仁木や鬼貫らによるお家乗っ取りを阻止すべく、息子の民部らとともに問注所に訴え出る。対決は勝元による急転直下の裁決で勝利し安堵するが、最後の抵抗を試みた仁木に刺され、足利家の繁栄を願いながら息を引き取る。

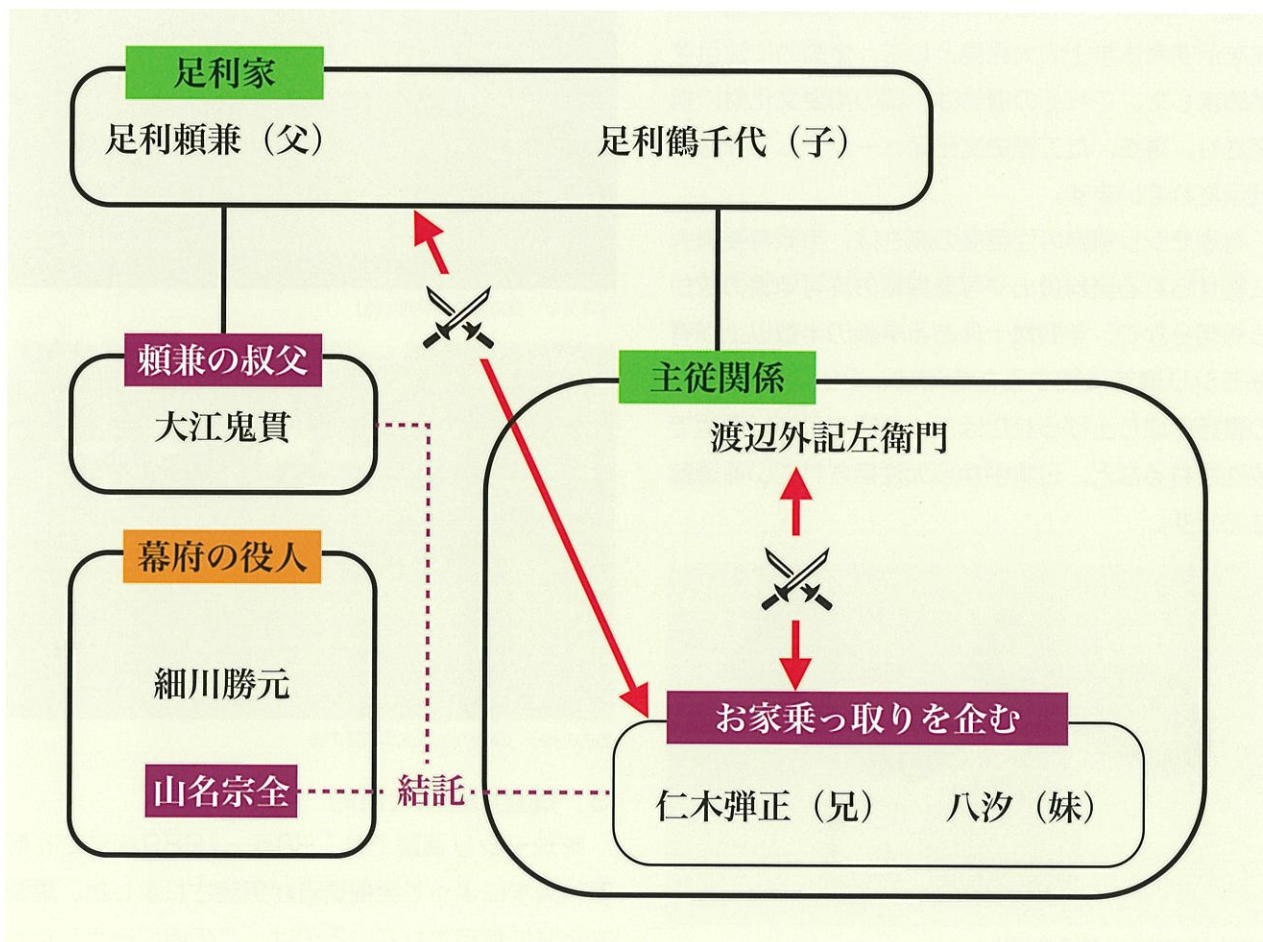
らが、足利家の乗っ取りを企む物語です。足利家家督争いに、悪人弾正から鶴千代を擁護する渡辺外記が幕府に訴え出たため、弾正一味の御家横領の件は幕府問注所の裁決を受けることになります。しかし、裁き役は悪人方の山名宗全だけでした。これでは、渡辺外記がどんなに頑張っても結果は明白です。実際、評定は山名が証拠の品を燃やすなど悪人方が有利に進めます。もはや忠臣たちの命運は尽きたかに見えたその時、細川勝元が出座します。

勝元は、表面上は渡辺外記たちを叱りつけ、「判決は変わらない」と言いながら、「主君の放埒を知らなかった」と言い切る弾正を「職務怠慢だ」とやりこめます。そして弾正らには、鶴千代の後見人を弾正の派閥から出すために幕府に上告書を出すように言います。弾正はその場で上告書を書きますが、勝元は「実印を押せ」と言います。用心深い弾正は、自分の実印は陰謀にかかわる密書にあちこち押しているので、瞬時に髪の毛をひと房抜いて紙の上に置き、その上から実印を押して「偽装」します。

こうすれば印の形がかすれるので証拠になりにくいと思ったのです。

勝元は、弾正の陰謀にかかわるあやしい文書を持ち出してこれについて問いただすと、それは「実印の形が違う」と言い逃れします。しかし勝元は、さきほど弾正が髪の毛を下にして捺印したのを見ていたので、「公文書の実印に工作をするとはけしからん」と弾正をやりこめます。このようにして、聡明な勝元の裁きによって、評定は一転、外記たち忠臣の勝利となったのでした。

ここからわかるのは、証拠書類をもとに事実関係を突き詰め、裁きが行われたということです。しかもこれは歌舞伎の演目として江戸の庶民が楽しんでいた演目ですので、劇中の社会制度は共感できているはずです。そして勝利を勝ち取るために偽装することが罪であることがわかります。江戸が遠い時代ではなく、私たちの現代社会と地続きの世界であることを感じてもらえれば、リアル江戸時代が見えてくるのではないのでしょうか。



全国の注目を集める遺跡 —有珠モシリ遺跡—の発掘調査

伊達市噴火湾文化研究所 永谷 幸人

1. 日本中から注目されている遺跡

伊達市には全国的に有名な遺跡がいくつもあります。その中の一つである、史跡北黄金貝塚が世界文化遺産に推薦されることが決定しましたが、市内には、この北黄金貝塚と同じくらい全国的に注目されている遺跡があることをご存知でしょうか？

それが、有珠モシリ遺跡です。この遺跡は、噴火湾の北東岸、洞爺湖町との境付近に位置する遺跡で、縄文時代の終わりから続縄文時代（約2,000年前）にかけての貝塚と多くの墓が見つかっています。

遺跡から出土した装飾豊かな銚や、クマとクジラを彫刻した儀式用のスプーン、沖縄付近の海でしか採れないイモガイでできた腕輪などが、続縄文文化の豊かな暮らしや約2,000年前の長距離交流の存在を示す考古学上の大発見として、全国的に注目を集めました。これらの遺物は、国の重要文化財に指定され、現在、だて歴史文化ミュージアムで保管・展示されています。

有珠モシリ遺跡の注目度の高さは、市教育委員会に寄せられる資料貸出や写真掲載の許可申請の数からも明らかで、年間数十件ある申請の半数以上が有珠モシリ遺跡に関するものです。2019年も多くの書籍に取り上げられたほか、沖縄のテレビ番組で放送されるなど、日本中から大注目されている遺跡なのです。



イモガイ製の腕輪（【重要文化財】）

2. 有珠モシリ遺跡の立地

有珠湾の湾口に位置する三角形の小島（面積約10,000㎡）が有珠モシリ遺跡です。この小島は、有珠山が山崩れを起こした際の土砂や岩石によってできた丘陵（流れ山）の先端が、海水の浸食によって削られてできたと考えられています。

通常は陸地から約150m離れていますが、干潮時には陸続きとなります（私有地のため、無断での立入りはご遠慮ください）。島は全体的に低く平坦で、最も高い場所でも標高は約8mしかありません。地表には有珠山から流れてきた巨石が点在し、独特な景観を形成しています。



有珠モシリ遺跡全景（手前の島）



島内の様子（窪みが札幌大調査区の跡）

3. 調査の経緯と目的

有珠モシリ遺跡では1985～1989年まで札幌医科大学によって発掘調査が実施されました。重要文化財に指定されているのは、この時に出土したも

のです。また、墓から出土した古人骨の研究では、北海道の人の成り立ちの解明に大きく貢献し、人類学的な研究の基礎資料となっています。

しかし、1980年代の調査が人類学的な研究に重点を置いたものであったこともあり、遺跡の範囲や遺構の分布、文化的な内容などの考古学的な情報は十分に把握されていませんでした。そこで、噴火湾文化研究所では、2018年度から科学研究費助成事業の一環として、東北芸術工科大学（青野友哉准教授）と共同で本遺跡の調査を行うこととしました。

2018年に島全体の測量調査を実施し、2019年には遺物や遺構の分布を調べるための調査（1×1mの調査区を4カ所発掘）と、貝塚と墓を調べるため札医大調査区の再発掘調査（約6㎡）を実施しました。

4. 調査成果と今後の展望

今回の発掘調査では、標高5m付近の広い範囲で縄文晩期から続縄文前半期の土器が出土しました。このことから、島の中央部の平坦面一帯が利用されていたと考えられます。

札医大調査区の再発掘では、貝殻に混じって若年や成人の人骨が散乱して出土したことから、「改葬」が行われていたと推測されます。出土品としては、ミュージアムで展示しているものと同じ形の鹿角製の銚^{ちり}など、続縄文文化の副葬品とみられる遺物が出土しました。また、本州以南に棲息するベンケイガイ製の貝輪や、北海道には棲息しないイノシシの臼歯^{ちり}が出土したことから、本州との交流が示されました。さらに、赤色が特徴的な角閃石安山岩^{かくせんせきあんざんがん}を用いた墓が見つかるなど、今後の調査への期待が高まる成果を上げることができました。

2020年には、今回見つかった墓の詳細を調べるとともに、有珠モシリの続縄文人が何を食べていたのか、人の移動や交流はどのようなものだったのか、イノシシは家畜化されていたのかなどについて、発掘調査や科学分析を行って解明していきたいと考えています。今後の調査にご期待ください。

本稿は、JSPS科研費18H00749「狩猟採集文化

と農耕文化の接触による社会の変容と地域的多様性に関する学際的研究」（基盤研究（B）研究代表者：青野友哉）の成果の一部です。



札医大調査区の発掘調査（中央の赤い石の下が墓）



装飾が施された銚の出土状況



調査風景

? 続縄文時代とは

本州以南では縄文時代が終わると弥生時代になりますが、北海道の歴史はこれとは異なっています。稲作（農耕）文化が九州から四国、本州の北部まで広がったのに対して、北海道では縄文時代と同じように生活の基礎を狩猟・漁労・採集とした文化が続いていました。なかでも海の資源の利用が活発で、装飾豊かな漁労具が多数出土しています。また、本州やサハリンなど北海道島外の文化との交流により様々な物を取り入れつつ、独自で豊かな続縄文文化を生み出したのです。

わっかおい
一若生2遺跡一の発掘調査

伊達市噴火灣文化研究所 永谷幸人

1. 貝塚が密集する大規模遺跡群

2019年に発掘調査を実施した若生2遺跡は、
国道37号線の若生バス停付近に位置する、縄文時
代中頃（約5,000年前）の集落遺跡です。

遺跡は海岸線から約700m内陸の丘陵上にあります。この丘陵は、遺跡の北側に位置する有珠山が山崩れを起こした際に流れ出た土砂や岩石を基盤としているため、周囲には巨石が転々と露出し、起伏に富んだ地形を形成しています。

遺跡の北東400mの地点には、若生という地名の語源（アイヌ語の「wakka-o-i=水・ある・処」）となっている湧水点があります。この湧水点を中心とする6つの地点に貝塚が分布する大規模な集落遺跡群（若生貝塚と若生2遺跡）として知られており、若生2遺跡はその中のC・D地点に該当します。

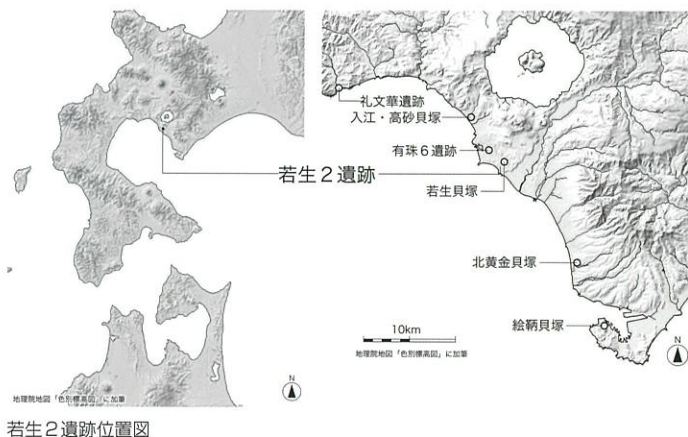
2. 若生遺跡群の調査・研究史

若生遺跡群での最初の調査は、1920年頃にニール・ゴードン・マンロー（スコットランド出身の考古学者）が行った現地調査と遺物採集であるとされます。

1950年には、峰山巖教諭率いる伊達高校郷土研究部員によって4箇所の貝塚（A～D地点）が発見されました。その後、同研究部と北海道大学助教授（当時）の名取武光氏によってA地点の発掘調査が行われ、貝層の厚さが3mにもおよぶ縄文時代前期（約6,000年前）の道内最大級の貝塚が良好な状態で保存されていることが明らかにされました。

以後、発掘調査は行われてきませんでしたが、1999年に土地所有者が畑地の巨石を除去した際に貝塚が露出したとの連絡を受けた市教育委員会によって、遺物の回収作業が行われ、新たにE地点の貝塚が発見されました。

2014～2016年には、伊達市噴火湾文化研究所による科研費研究「噴火湾沿岸の縄文文化の基礎的研究（基盤研究（B））」（研究代表者：青野友哉）による発掘調査が実施され、A・E地点の貝層のブロックサンプル採取及び分析が行われたほか、分布調査によって新たにF地点の貝塚や竪穴住居や墓といった集落を構成する遺構が発見されています。



3. 2019年調査の成果

今回の発掘調査は、市の下水道新設工事に伴い実施されたもので、国道に沿った幅約1.5m、長さ約190mの範囲を調査しました。

その結果、以下の遺構が検出されました。



若生2遺跡全景

①貝塚

厚さ約60cmの貝塚が検出されました。貝塚の上部は国道改良工事などによって破壊されていましたが、下部は良好な状態で保存されています。貝塚が作られた時期は縄文中期後半（約4,500年前）とみられます。貝類のアサリやオキシジミが多くみられましたが、魚骨や哺乳類の骨は少ないようです。



貝塚

②獣骨集中

貝塚の下から、哺乳類の骨がまとまって出土しました。大半がエゾシカで、頭の骨の数から、少なくとも2個体分が含まれています。集中の範囲が後述する竪穴住居の跡に重なることから、竪穴住居跡の窪みにまとめて廃棄されたものと考えられます。



獣骨集中調査風景

③竪穴住居跡

貝塚や獣骨集中の下から、竪穴住居跡が検出されました。調査区の幅が狭いため、全体の構造は把握できませんでしたが、平面形は楕円形か卵型とみられ、壁に近いところから柱の跡が3つ検出されています。床面や覆土の中から遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明ですが縄文時代前期に作られたと考えられます。

この住居跡で注目されるのは、床面から多量の炭化材が出土したことです。住居を使わなくなった時に、壁や屋根の部材を取り外して竪穴の中に集めて燃やした可能性があります。



竪穴住居跡

このほかにも石で囲んだ炉の跡や、土器など多くの遺物が出土しました。こうしたことから、調査区を含む一帯に縄文時代中期の集落が広がっていたと考えられます。

これまで本遺跡は、国道の改良工事の際に大部分が破壊されたとみられていましたが、思いのほか遺跡の残り具合が良いことが分かりました。今回の調査範囲は狭く小さなものでしたが、今後の調査でさらに多くの発見があるかもしれません。その時まで遺跡を大切に守っていききたいと思います。

「17世紀アイヌ文化と環境に関する学際的研究」

北海道博物館・学芸員・理学博士 添田 雄二



■ 新たな研究がスタートしました

私達は、2019年から「巨大噴火・津波の痕跡を軸とした17世紀アイヌ文化と環境に関する学際的研究」を開始しました。この研究では、伊達市有珠地区での遺跡を発掘してアイヌの生活や文化を明らかにしつつ、古環境（巨大噴火・津波や当時北半球で数百万人が死亡したとされる小氷期）を復元して、人々がどのように対応していたかを探ることを目的としています。これは文部科学省・日本学術振興会の助成による研究で（JSPS科研費19H01352：研究代表者、添田雄二）、15名以上からなる道内外の人文学や自然科学分野の研究者で取り組んでいます。期間は2022年度までの4年間で

■ 800年前から続くアイヌ文化の歴史

アイヌ文化は、13世紀頃に成立して以降、現在に至るまでの800年間に、各時代、各地域において多様な文化を展開しながら変遷してきたはずですが、近代以降、アイヌの伝統文化が、北海道旧土人保護法（1899年）に象徴される日本社会への同化政策の影響で急速に変容を余儀なくされた一面があり、さらに、かつてのアイヌ民族は文字を使用しなかったため、当時の暮らしや文化を記録した資料は、主に1800年代以降の和人が残した古文書や絵画に限られます。このため、博物館や一般普及書等では、アイヌ文化が13世紀以降どのように移りかわって現代に至るのか十分に触れられないのが現状です。

したがって、アイヌ文化の歴史的変遷を明らかにするには、年代が正確に特定できる遺跡を発掘し、食生活や住まい、およびその背景にある古環境を人文学と自然科学による学際的な研究で多角的に検証しながら精度の良いデータを提示していくことが必要です。そして実は有珠の遺跡こそが、1663年の有珠山火山灰と1640年の駒ヶ岳噴火・津波痕跡との層位関係から、遺構や遺物の年代を特定できる遺跡なのです。

■ 「有珠」の重要性

17世紀という年代は、アイヌ文化の成立期とされる13世紀頃から現代までのほぼ中間にあたり、

歴史的変遷を考える上で極めて重要な時代です。私たちが調査している有珠のカムイタブコプ下遺跡では、住居（チセ）跡や畑跡、貝塚、墓が発見され、この地に集落が展開されていたことが明らかになっています（北海道博物館・伊達市噴火湾文化研究所2019）。昨年秋の調査でも新たな畑跡と貝塚を発見しました（写真1）。特に、チセ跡の存在は、当時の生活とその背景にある環境を探る上で必要不可欠です。このような条件を満たし毎年発掘できる遺跡は、今のところ北海道では有珠以外にありません。

■ 新しい手法

これまでの調査と関連分析では、現在より冬が長かったことや寒冷な環境に適応して根菜類（カブ）を栽培していた可能性、噴火・津波の規模とその影響など環境と人々との関係が明らかになってきました。これらの分析は継続しつつ、新たな調査分析も行います。

第一に、遺跡の直上を覆う1663年有珠山噴火の火砕サージ（高温・高速で山体を流下してくる火山灰とガス）の残留磁化を測定して温度を推定し、当時の噴火が人々へ与えた影響を具体的に探ります。



写真1 新たに発見した貝塚からマグロの椎骨も出土

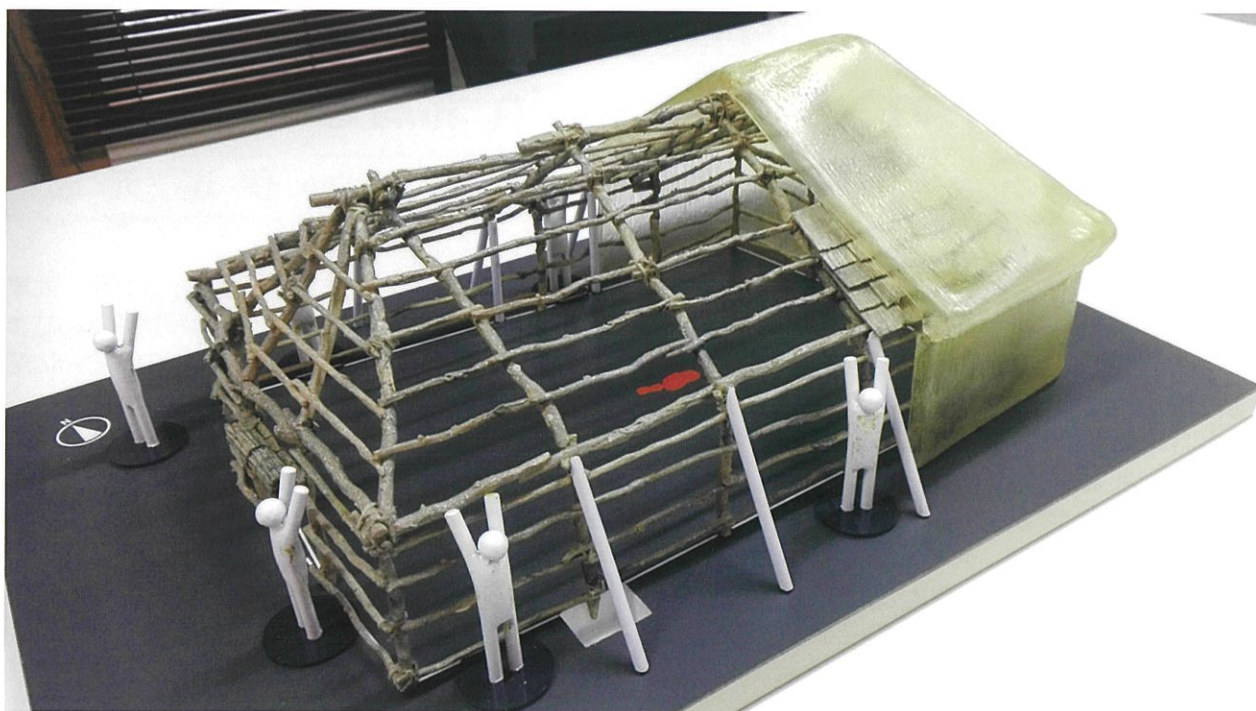


写真2 カムイタブコブ下遺跡チセの復元模型（監修：小林孝二氏）

また、有珠地区や噴火湾沿岸の遺跡から出土するラッコ骨の年代測定と同位体分析、および古代DNA分析を行います。ラッコ(千島ラッコ)は現在噴火湾に生息せず、より寒冷な千島列島で繁殖・分布しています。そこで、かつての生息域を各分析で検討し、環境およびアイヌ民族の生業との関係も探ります。

さらに、地中レーダー探査による畑跡の検出を試みます。噴火で埋没した畑跡の地中レーダー探査による検出は静岡県で報告されており、畑跡の上に火山灰が厚く堆積しているカムイタブコブ下遺跡でも検出可能と考えています。地中レーダー探査で畑遺構を確認できれば、それ以外の場所に貝塚や住居跡がある可能性があり、目的に合わせて発掘することができます。

■ もう一つの試み

これまで私達は、発掘現場説明会、洞爺湖有珠山ジオパーク共催バスツアー、シンポジウム、新聞での連載、学会発表や報告書等で研究成果を公表してきましたが、今後はさらに幅広く十分な理解が得られるような様々な取り組みが必要と考えています。

カムイタブコブ下遺跡で発見したチセ跡からは、これまで博物館等で紹介されてきたチセとは異なる姿が復元されました(写真2)。これはアイヌの建築文化の変遷を考える上で、重要な成果でした。そこで、この住居をモデルとした「体験学習用のチセ組み立てキット」を開発中で、当時のチセの特徴や建築方法、これまで博物館等で紹介されてきたチセとの違いを、実際に手を動かす体験学習行事を通し



写真3 本物の枝に樹脂を塗って硬化（柱として使用）

て深く理解してもらおうのが狙いです。キットの材料には実際の木(枝)を使用することでリアリティを持たせます(写真3)。最終的な完成とお披露目は約2年後の予定です。

また、成果の公表には伊達アイヌ協会にも協力をいただく予定で、発掘現場の見学や行事の開催等について何度か打ち合わせをしてきました。将来的には胆振地域の他のアイヌ協会にも協力をいただくなど、アイヌ民族の方々にも研究成果を体験的に理解してもらうようなより良い方法を構築していきたいと思っています。

■ 引用文献

北海道博物館・伊達市噴火湾文化研究所(2019)
伊達市カムイタブコブ下遺跡発掘調査報告書
一近世アイヌ文化期の集落一

ICOM KYOTO 2019

ポストカンファレンス in 北海道を終えて

だて歴史文化ミュージアム 伊達 元成

2019年に日本で初めて世界最大の博物館会議が京都で開催されました。この国際大会はICOM (International Council of Museums: 国際博物館会議) とよばれており、1946年に創設された国際的な組織で、世界のミュージアムの振興を目指しているユネスコの協力機関です。ICOMには、世界約140の国と地域から様々な分野のミュージアムの専門家が参加しています。3年に一度、全てのメンバーが一堂に会する世界大会が開催されます。

この機会に、北海道に世界の博物館関係者を呼び込もうと企画されたのが「ICOM京都大会2019ポストカンファレンス in 北海道」です。主催はICOM京都大会2019組織委員会と、伊達市・洞爺湖町、地元商工会や観光関係による伊達洞爺湖ミュージアム地域振興プラットフォーム（実行委員会名誉委員長：石森修三北海道博物館館長）です。

■ポストカンファレンスツアーの目的

北海道は近年、その豊かな自然と食でアジアの観光客を中心に高い人気を誇っています。伊達市は「北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録」を目指す北黄金貝塚、アイヌ民族、そして武士による開拓でもたらされた歴史文化背景をもつまちです。また、洞爺湖町も入江・高砂貝塚を有し、この地域には縄文から続くその豊かな風土に根差した文化を展示する地方博物館が点在しています。2019年4月に日本一新しい地方博物館「だて歴史文化ミュージアム」が開館したこともあり、ICOM KYOTO 2019のテーマである“Museums as Cultural Hubs: The Future of Tradition”（文化をつなぐミュージアムー伝統を未来へ）を地方に転換したツアーを開催しました。そして北海道の研究者とICOM研究者の交流促進を図ることを目的としています。

■どんなことをしたのか？

一つはテクニカルビジットという施設見学会とシンポジウムを実施しました。今回は6か所の地方博物館（二風谷アイヌ文化博物館・北黄金貝塚・だて歴史文化ミュージアム・入江高砂貝塚・洞爺湖ビジターセンター及・有珠山噴火関連遺構）の施設と2020年開館の国立アイヌ民族博物館を巡りました。そこでは学芸員や解説ガイドが業務や施設につ

いて説明しました。縄文文化からアイヌ文化、武家の集団移住にジオパークという魅力がたくさん詰まった地域であることを、海外の研究者の皆さんに紹介することができました。

シンポジウムはだて歴史の杜カルチャーセンターで開催しました。日本ではこれから本格的な少子高齢化時代が到来し、中でも北海道は全国よりも10年先んじて進展すると言われ、過疎化や都市機能の低下により、人々のつながりや地域文化、伝統の喪失が危惧されています。地域がもつ歴史文化は、地域のアイデンティティとして地域の発展には欠かせない要素であり、それらを未来へつなげる役割を果たす地方博物館の重要性を考えるシンポジウムを開催しました。

シンポジウムはICOM会長スアイ・アクソイ氏の挨拶からスタートし、イリナ・ジュモツ氏ICR（地方博物館国際委員会）委員長、ミリアム・モレル＝ドゥルダール氏 ICMAH（考古学・歴史の博物館・コレクション国際委員会）委員長、そして北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員教授佐々木利和氏による講演が行われました。

最後に博物館の運営、集客そして研究・保存と活用の在り方について、地方博物館の課題を議論しました。実行委員長の石森修三氏をモデレーターに、パネリストは先の講演者に加えて伊丹市昆虫館副館長の坂本昇氏と小樽市総合博物館館長石川直章氏らによるパネルディスカッションを実施しました。ここでは北海道に初めて設立される国立博物館と地方博物館の地域連携による相乗効果の可能性も議論され、北海道の地方博物館は、海外からも充分評価されるコンテンツがあり、他館と連携することでよりその魅力が増すはずだと議論が盛り上がりました。





だて歴史文化ミュージアム

Date City Museum of History and Culture

開館時間 9時～17時（※入館受付16:30）
休館日 毎週月曜日（※月曜日が休日の場合はその翌日）
観覧料 一般：300円 小・中学生：200円
 ※特別展の料金はその都度定めます。



TEL:0142-25-1056 FAX:0142-25-8922
 E-mail: date-museum@city.date.hokkaido.jp

■藍染体験学習メニュー

メニュー	ハンドタオル	ハンカチ	バンダナ	エコバック	Tシャツ	シルクストール (小)	シルクストール (大)
個人	500円	550円	900円				
団体 (15名以上)	450円	500円	800円	1,100円	2,600円	2,500円	3,000円
修学旅行	400円	450円	700円				

※染織方法は絞り・板締めのみです。 ※小・中学生が修学・見学旅行その他学校行事として団体で体験学習を行う際に、団体料金が適用になります。

■藍染持ち込み（※要予約）

天然素材の布・綿・シルク・麻など	1回に染める量の上限は1kgとします。	10gにつき80円
------------------	---------------------	-----------

■解説（※1団体（1クラス）当たり。2週間前までにご予約をお願いします。）

ガイド	伊達の歴史と文化について解説します。	500円（15名まで） 1,000円（45名まで）
-----	--------------------	------------------------------

令和2年度 展示会スケジュール（予定）

★本館2階特別展示室

※日程・内容は変更になることがありますので事前にお問い合わせください。

4/28(火)～6/28(日)

多文化との出会い

「アイヌ民族と亶理伊達家中の関係秘話」

このモンベツの地で亶理伊達家家中の人々と、アイヌの人々がはじめて出会いそこから始まった彼らの歴史に迫ります。

7/31(金)～9/6(日)

洛中洛外図屏風と京の文化

洛中洛外図屏風亶理伊達本の公開。
京の文化、武家文化の史資料を合わせて展示します。



7/7(火)～7/26(日)

奥州相馬氏野馬追図屏風

相馬藩と領地を隣合わせにしていた亶理伊達家は、相馬に伝わる神事「野馬追」に家臣を派遣し調査しました。そして、その様子を屏風にしました。

2/6(土)～3/21(日)

亶理伊達家のお雛様

開拓移住の際に持ち込まれた亶理伊達家のお雛様。伊達市のあゆみや子ども達の健やかな成長を見守り続けているお雛様をご堪能ください。



9/12(土)～10/25(日)

発掘されたモシリ遺跡

数十年ぶりに発掘調査が行われたモシリ遺跡。重文文化財に加え、新発見の出土品を初めて展示します。



11/1(日)～12/27(日)

亶理・山元・柴田・新地

一ふるさとの歴史と絆

姉妹都市・歴史友好都市の町と伊達市とのつながりを歴史的経緯から紹介します。

★宮尾登美子記念アートホール

7月～8月

だて2020オープンアトリエ

伊達市在住の若手画家による作品の公開制作や、作品の展示およびワークショップを開催します。

9月～10月

フランク・シャーマン展

～藤田嗣司と仲間たち～

市に寄託されているフランク・シャーマンコレクションの展覧会を開催します。





「北海道・北東北の縄文遺跡群」

史跡 北黄金貝塚の世界遺産 推薦決定！

伊達市を、世界遺産のあるまちへ。



World Heritage Candidate “Kitakogane Shellmound” Jomon Prehistoric Sites in Northern Japan

本市の「北黄金貝塚」を含む「北海道・北東北の縄文遺跡群」(正式推薦名称：Jomon Prehistoric Sites in Northern Japan) がユネスコの文化遺産の推薦候補に選定されました。

これまで、推薦準備に奔走してきた皆さまには大きな朗報であり、これまでの取り組みに感謝申し上げたいと思います。

「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、北海道・青森県・岩手県・秋田県に点在している縄文時代の各時期の遺跡や、環状列石などの記念物で構成された考古学的遺跡群で、2021年の世界文化遺産登録を目指しています。

伊達市ではこれまでも北黄金貝塚での学習イベントや地域の文化財を生かした取り組みを行ってきましたが、今後はより一層、縄文遺跡を含めた地域の文化資源の保護と周知に努め、世界遺産登録を目指していきます。



史跡北黄金貝塚公園

Kitakogane Shellmound Park

TEL・FAX 0142-24-2122

開館時間 9時～17時
休館日 12月1日～3月31日

※休館中のお問い合わせは、伊達市教育委員会生涯学習課文化財係まで

TEL：0142-23-3331（内線748） FAX：0142-23-1084

みなさまのご来園を
お待ちしております。



■縄文体験学習メニュー（※1団体1種目で、2週間前までにご予約をお願いします。）

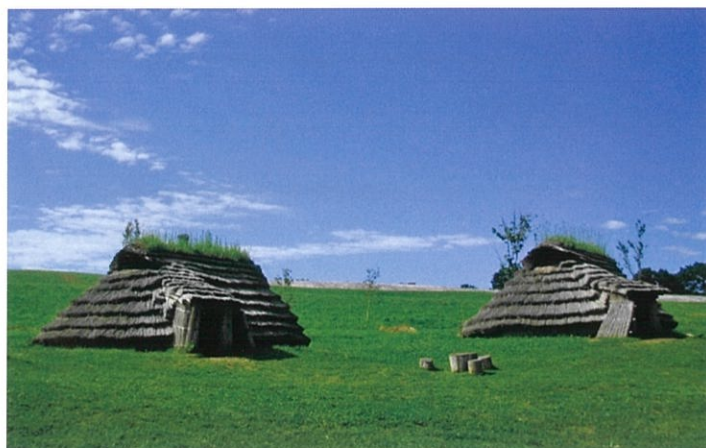
メニュー	内容	料金
模擬体験発掘	発掘調査の方法を楽しみながら学べます。土の中からは、本物の土器や石器がでてきます。	300円
釣針づくり	鹿の角を紙やすりで磨き釣り針を作ります。	300円
勾玉づくり	滑石という石を紙やすりで磨きネックレスを作ります。	500円
黒曜石ナイフづくり	黒曜石を鹿角のハンマーで加工しナイフを作ります。	500円

■縄文ワークシート（※縄文体験メニューと併せて行えます。）

縄文ワークシート	解説を聞きながら公園内を歩き、問題を解いていく体験型の見学です。	50円
----------	----------------------------------	-----

■解説（※1団体（1クラス）当たり。2週間前までにご予約をお願いします。）

ガイド	公園内を巡り、遺跡と出土品の内容と価値について解説します。	500円(15名まで)
		1,000円(45名まで)



Newsletter【噴火湾文化】第14号

●編集・発行 伊達市噴火湾文化研究所

(伊達市教育委員会 生涯学習課)

〒052-0022 北海道伊達市鹿島町20番地1

TEL. 0142-82-3299 FAX. 0142-23-1084

E-mail bunka@city.date.hokkaido.jp

URL <http://www.city.date.hokkaido.jp/funkawan/>

●印刷 (有) 村上印刷

〒052-0022 伊達市梅本町4番地4

TEL. 0142-23-2625 FAX. 0142-25-2459

2020年3月10日発行